住居の中の子供室（第1報）
— 設置に際して —

荻野 妙子

1. はじめに

住居の中でも育児のためのspaceは大きな位置を占めるものである。現在、住宅の面積は以前に比べ非常に小さくなっているが、大人の世界と子供の世界との違いを認識し、次の世代を担う者が社会的に認められる人間で成長していくための準備期間をより快適な生活環境の中で過ごせるよう計らうことは、極言すれば、大人達に課された義務であると言えよう。そこで、子供室について、どう対処していくべきか、第一段階として、子供室を設置する前に考えるべき点（個室としての機能と子供の特性との関連など）について検討してみた。

2. 和風住宅の特徴

以前の日本住宅においては、家族を中心の主従関係を重視した部屋構成が考えられていたために、主人の部屋、ある場合は、来客の接待用と主人の部屋を兼ねた部屋が全全体の中で他を圧し、大きな面積と、良い位置とを占め、仕上げや調度も家の中で一番良い物が集中され、他の家族には、気軽に入れない小さな城郭のようなものであったようである。これは、貴族や武士の住宅においての例であるが農家や町屋、または明治以降の中産階級以上の住宅でもその傾向は少からず見られたようである。このような家族中心の縦の関係による家構成から、戦後民主主義の“平等”という考え方が、住宅にも大きな影響を及ぼし、主人以外の家族の個室も考慮されるようになり、横のつながりを持つ家構成が成立したと言われている。戦前ににおいては、子供室を確立するという思想は、金銭的に余裕のある階級や、特殊な知識階級に限られていたようである。屋根裏部屋や玄関脇の書生部屋の様な部屋が成人した子供室の個室に当てられ幼児、小児は両親の部屋に雑居していたのが一般的の姿であり、戦後、子供室の必要性が認められるようになった事は、民主主義の生んだ大きな特徴であると言えよう。

3. 個室の確立

食事分離、性別就寝、個性の尊重などから家族各人の個室の確立が要求されるが

— 19 —
住居面積の制約を受ける一般の住居では、相当困難な現状にあるようである。夫婦以外の家族数（老人、子供）の多い家族では何人かで部屋を共有せざるを得ない事があるだろう。この場合、性別就寝の原則だけは守られなければならないう最低条件だと思う。子供の場合、男子と女子の成長の過程は、身体の発達状況性格の差異が年令の増加に伴って、大きく変化するので、男女の共有室を設置するのは無理であると言われている。殊に、幼児期から青年期まで広範囲で複雑な成長段階にあるので、同じ年令でも心身ともに個人差がある事は心理学学でも知られていることである。また、刺激の多い生活の中で個人の自由を確保してやる事は、子供の思考力と独立心を養うことにもなると思う。これらの事から、個性を生かし、創造力を発揮できる場所が必要となり、個室の確立が望まれる。

また、個室の確立の面から考えた時、鍵の必要性が論ぜられる。三輪正弘氏はその著書の中で、「子供の個室としての独立性を認めるということは、内側から施錠できる部屋をつくることなのです」と言っているが、鍵はそんなに必要なものであろうか。もちろん家と外界との出入口には必要欠くべからざるものであるが、個室に対する鍵の取り付けはその人個人の価値観の相違もあるだろうが、是非と必要事を進めないと私は考えている。特に子供室の場合、他の家族とのcommunicationや親の監督の必要な時期なので、子供室を密閉する形になることは避けるべきであるし、火事、地震などの災害時の避難の妨害となる事も考えられる。用事のある時はdoorをknockして、相手の意向を聞くなどのmannerを守れば、鍵がかかっていると同じ事だと言えるのではないだろうか。故に私、子供室に鍵は必要ないと考える。

4. 子供室の計画と成長する間取り

子供室の計画にあたり、第1に考えられる事は、室の主人である子供が著しく成長変化することである。子供室の在り方を成長変化にいかに対応させるかを追究するために子供の成長を(i)幼児期(ii)少年期(iii)青年期の三段階に分けて考えてみた。なおこれをまとめるとあたり、松下保氏の二段階説、清水一・大原早苗・野口光男・中野正男諸氏の三段階説、三輪正弘・大須賀常良氏の五段階説を参考にした。

(i) 幼児期

1) 乳児は殆ど一日中眠っているが、その間も目覚しい発育をする。そのため静かで眠心地の良い場所と設備が必要で子供室というよりも、両親の寝室にベビーベッドを置き、そこで育児をするのが良いと思う。ベッドは、床面から遠ざけること
とによりはこりを避けられることと、おむつの取り替えや授乳などに便利である。市販品でも手製でもよく、大きさは、身長 + 20 ～ 30 cm を最小とし、1 歳ならば 1.1 m、3 歳なら 1.3 m であれば十分であると言われている。

2) 生後 4 ケ月すると、ある程度の新鮮な外気や日光が必要とするとされているが、最近家屋で昼寝をしていた赤ん坊が日射病で死亡するなどの事故が起きているので、日光浴にも、母親の充分な注意が必要である。

3) 6 ～ 7 ケ月位で座ることができるようにになるので、食事用の椅子を用意し、子供に自分で食べようとする独立心を持たせるようにするといい。

4) 1 才位から、立って歩くようになるので、縁側・台所・階段の上り口・窓などに柵・手摺などを設け、危険を防止する。この際、手摺など上れないよう水平の支材を用いないなどの配慮が必要であろう。

5) 自分で遊んだ玩具などを必ず自分でかたずけるようにするため、整理箱か籠を与えるといい。

6) いくら汚しても良い一つの場所を与え、他の場所は汚さないようinitWithi

7) 一人で出し入れができるようになったら、低い扉のない簡単な棚を造り、小さな物は箱、大きな物は棚にしまう習慣をつけるようにすると良いと思う。

8) 家は主人夫婦の生活が基本であり、老人室、子供室はそれに附随しているものであると考えられる。子供の遊びや観音などで大人の世界を乱さない工夫が必要であろう。特に老人室と子供室は、できるだけ離して設けるべきだと思う。

(ii) 少年期

1) 幼児期は、畳や危険防止などの点から親の監督、保護を最も必要とする時期に当るので子供室の必要性は殆どないと考えてよいと思うが、小学校に通うようになったら、独立心や、創造力を養うために、子供室を設けてやるべきだと思う。

2) 遊び・工作・絵画・勉強等をするのに、机・テーブル・カウンターなどを設ける必要があるが、机と椅子は、子供の体格に合わせて、高さを調節できるものが望ましい。一般に小学生的適合寸法は次の式により求められている。（小原二郎著 インテリア・デザインによる）

座面高 = 下肢長 - 1 cm

机面高 = 座面高 + (1/3 座高 - 1 cm)

窓際に上げ下げの調節できる棚を設けて机としたり、箱を積み重ねて台にした机を用いたり、縦、横、高さの各寸法の違う三面使用の椅子を用いるなどは、体格に
合わせるための一つの案である。

3）中学から高校にかけては、肉体的にも精神的にも自我の急激な発展期であると言われている。この時期には、子供室が是非とも必要であり、“自分の部屋を持たないで育った子供は、自我が未分化のまま成人してしまう”という意見もある。しかし、までの日本の住宅では、殆ど子供室を設けていなかったという事実からみても、これは極端な言い方に少し疑問も残るが、子供の成長に大きな影響を与えることは、確かに言えると思う。

（ⅲ）青年期

1）自我の確立と共にprivacyの要求が強くなる時期。中学、高校生からprivacyの要求は出てくるが、まだ完全に責任のとれる状態ではないし、親の監督が必要な時期なので、とり立ててprivacyを守らなければならないという必要はないが、大学、社会人となると、自立の意欲と社会への抵抗意識に囚れて、自己開発と自己批判のcontrolに苦しむ時期であるうえ、何よりも、社会人として認められなければならない段階であるので、はっきりprivacyの守られた個室が必要であると考えられる。

以上は、一般的に考えたものであるので、必ずしも、全ての家庭の子供に一律に当てはまるものではない。故に親が、その子供の特性を観察し、その子供に合った部屋造りをするべきであると考える。

幼児期は、育児の面から、両親の部屋近くに置いた方が都合がいいが、少年期、青年期には、独立心を養うことと、騒音などの面から、間取りの上でお互いに引き離した方がよいと考えられるので、幼児期から少年期への移行の時期に部屋の改造、配置替え、増築などができるような配慮があれば望ましいが、現在では、きびしい住宅敷地難であり、一戸建ての住宅でも、増築がなかなか困難な時代になっている。一方、都市の住宅は、集合化高層化し、一成に密度を上げる傾向にあるので、総体の延面積を拡大させることはできない。従って、家族の人数による転居から転居が容易できるようなsystemが確立されると良いのだが、今の段階では確実に転居できる保障はない。そこで考えられるのが、内部での成長変化、あるいは内部増築という方法である。次の図は、三輪正弘環境造形研究所の考察による、ある社宅のapartment一戸分の間取りで、3～5人用である。設備部分（玄関・台所・風呂・便所）を残し、その他の間仕切り部分を家具や簡単な間仕切りで囲み、2→3→4と家族の成長に合わせて変化させたものである。

—22—
この図に見られるような共有部分の縮少は家族数の成長による一人当たりの面積の減少に伴うやむを得ない現象であるが、4の段階では、四人用の住居であり、もう一人子供が増えた時は、居間と食堂を同じspaceで処理しなければならなくなると思われる。家族のcommunicationの場が狭くなるのでは、残念な事だと思うが、この例に見られるような家族数に伴う間取りの成長変化は現在の住宅難の中で巧みに扱われた解決法の一つだと言えると思う。

5 子供室の広さの決定

個室としての機能も考え合わせなければならないが、最低限必要な広さは、和風の場合は、夜具が昼間にspaceを抱束しないので、蒲団を敷き、掛蒲団が充分に広げられた形のspaceと、それに、机・箪笥・本棚などの家具を置ける広さがあればよい。洋風の場にはベッドの寸法と、机・本棚・衣類戸棚などの道具と、部屋に出入りするためのdoorの開閉に必要な寸法などにより決定する。

部屋の間取りを計画するときに、習慣的に4.5畳とか6畳とか畳の数で広さを決定しがちだが、図にあるように、実際に線を引いてみると、4.5畳とか6畳の形にするよりも、同じ面積でも、もっと細長い方が有効に使えることがわかる。また、立体的にも直方体、立方体でなければならないという事はなく、屋根裏空間の利用、天井の勾配、窓の配置など、自由に抜って、他の部屋にない、子供独特の創造的な空間を作り出すよう心掛けると良いと思う。

子供が2人になったとき、違い様式の2段ベッドを設け、ちゃんと間仕切ってドアを設けます。
a こどもベヤの変形方法（4.5→4.35畳）
ふつうの4.5畳を右図のように幅をそろえて奥行きを伸ばした場合、面積はわずかに4.5畳より小さくなり（4.35畳くらいにあたる）が、ベッド・衣類戸棚・机・本棚のレイアウトは同様にうまくいきます。とくに衣類戸棚が大きくなることが利点です。このようにこどもベヤを内部の家具配置から追究してみると、必ずしも在来の日本住宅4.5、6畳にしばららず、自由に取り扱えることがわかります。

b こどもベヤの変形法（6→6.25畳）
この場合は6畳をもとに、幅を1.25間にそろえて、奥行きを2.5間にした場合との比較を試みたものです。これだけベヤの奥行きがありますと、いままでのレイアウトとまったく違った室内の扱いが可能になります。本棚がたっぷりと重、机をカウンター状に組みつけてしまうと、実にひろびろと豊かな感じになります。こどもベヤ(1人室)では、室幅が内法寸法で210cmから220cmが適当です。

設計 三輪正弘 “これからの住いとインテリア”より

6. おわりに

現在の日本では、子供室の与えられていな子供が60%以上を占めると言われ、まだまだ住宅事情のよくない事を見ている。が、子供室を与えているから、それでいいとは言えないと思う。子供室は、大人への人間形成のための準備段階を過ごす場であり、子供に大きな影響を与えるものであると言えよう。便利さばかりを追究したような装飾過剰の機に見られるように、子供の創造性や個性を自由に発揮できる部分を取り上げてしまうたは子供室の持つ意義を大きく欠くものであると思う。子供室は、子供が自分自身で作りあげるべきものであると考えられるので、過保護にならずよう心掛けるべきだと思う。

また、子供は大人の模倣をしてながら、成長していくものだと言われている。他の家族との communication の場との連絡や、他の個室との関連なども考え合わせた上で、間取りを考える必要があると思う。個室というとすぐに、privacyの尊重が上げられるが、子供室の場合は青年期までは、重視しなくて良いと思う。かえって、親の監督や指導が必要な時期であると考えられるので、子供が孤立してしまわな
いろんな、かといって過保護にならないような配慮が必要であろう。

今迄、子供室には彼の薄かった日本住宅ではあるが、より住みやすく、使いやすい、子供にとって最高の“城”となるような部屋造りをしていくことを今後の課題として研究を進めていきたいと思う。

最後にこの稿をまとめるに当り、御指導をいただいた、本学塚川旭教授に厚く感謝いたします。

参考文献

・相川三郎著“住居の計画” 彰国社
・大須賀常良著“住居学” 彰国社
・松下清夫・武保共著“住居” 家政教育社
・清水一著“建築士技術全書・設計・製図・計画” 彰国社
・東方洋雄著“現代の住空間” 日本経済新聞社
・“建築学大系” 4.日本建築史. 28 独立住宅 彰国社
・吉阪隆正著“住居学” 相模書房
・三輪正弘著“これからの住まいとインテリア” 日本放送出版協会
・漆原美代子著“Interior Design” 彰国社
・“Children s Room and Play Yards” A sunset Books
・小原二郎著“インテリアデザイン1・2” インテリア出版会
・Zuhause（1973, 1）（1973, 6・7・8）（1974, 7・11）（1975, 5）
・Das haue（1972, 12）（1974, 4・7）（1975, 5）
・“Nob” インテリア出版会（1974, 秋号）
・SCHONEL WOHNEN（1974, 5）
・Japan Interior Design インテリア出版会 193（1975, 4）
・LA Riviesta Dell’ARREDAMENTO INTERNI №82（1973）